

▶ 第65回法円坂地域医療フォーラム

要予約

糖尿病・内分泌内科

当事者と共に考える
糖尿病医療
～心理面から最新医療まで～

日時 2025年11月15日(土) 15:00-17:30

会場 大阪医療センター 災害医療棟3階 講堂

司会 大阪医療センター 地域医療連携推進部長 巽 啓司

大阪府医師会生涯教育研修カリキュラムコード CC 84.76.4.4

元プロ野球選手 岩田 稔 氏

元阪神タイガース投手。大阪桐蔭高在学中に1型糖尿病を発症するも、関西大学を経てタイガースに入団。WBC日本代表や日本シリーズ登板など、病と闘いながら16年の現役生活を全う。引退後は阪神タイガースCAとして活動し、糖尿病啓発や地域貢献にも尽力している。



講演内容

【第一部】 座長：糖尿病・内分泌内科 医師 岸 由衣加

- 1.「新しい糖尿病治療薬について」
糖尿病・内分泌内科 医師 秦 誠倫
- 2.「1型糖尿病、膵切除後糖尿病を持つ方を支える先進糖尿病テクノロジー」
糖尿病・内分泌内科 医師 松廣 有紀

【第二部】 座長：糖尿病・内分泌内科 科長 加藤 研

- 1.「ピアサポーターの重要性～私にとっての岩田選手～」
糖尿病・内分泌内科 シニアレジデント 石橋 幹也
- 2.「やらない、しゃべらない！～1型糖尿病だからできたこと～」
元プロ野球選手 岩田 稔（株式会社Family Design M）

法円坂地域医療フォーラム
お申し込みはこちら



● 今後の開催予定

2026年2月7日(土)

血液内科・血友病科

ONH NEWS

大阪医療センター 地域医療連携広報誌
[オーエヌエイチニュース]

No.
88

2025
Autumn



特集

がんと生きる時代 ～広がる治療の可能性～

放射線治療科 科長

田中 英一

がんセンター長
下部消化管外科 科長

加藤 健志

消化器内科 医長

長谷川 裕子

読者
アンケート

ONH NEWS[オーエヌエイチニュース]では、年4回、当院の最新情報をお届けいたします。
より充実した広報誌づくりの参考にさせていただきますので、アンケートにご協力をお願いします。





放射線治療科 科長

がんセンター長 / 下部消化管外科 科長

消化器内科 医長

田中 英一

加藤 健志

長谷川 裕子

特集

がんと生きる時代

～広がる治療の可能性～

2人に1人が罹患し、今後も患者数の増加が予測される「がん」。一方で、近年はロボット支援下手術や免疫療法、遺伝子治療の普及に加え、放射線治療の高精度化によって、治療の可能性は広がっています。がん診療連携拠点病院である当院においても、医療の進歩や地域のニーズに対応しながら、高度かつ専門性の高いがん治療を展開しています。

大きく変化している がん治療の現在

日本では年間100万人以上が新たにがんと診断され、全死亡の約27%ががんによるもので、死因の第1位となっています。部位別罹患数では、男性では前立腺・大腸・肺・胃、女性では乳房・大腸・肺・胃の順です。最近では若年層の大腸がんが増加しており、原因は明らかではありませんが、食生活を含む生活スタイルの欧米化が影響していると考えられています。高齢者の膵臓がんも増えており、今後も患者数の増加が予測されます。

かつてがんは「不治の病」とされていましたが、治療技術の進歩や早期発見・早期治療の普及などにより、治療の可能性は確実に広がっています。しかし依然として大きな国民的課題であり、「高齢化に伴う患者数の増加」、「がん検診率の低さ」、「地域格差」などの問題を抱えています。特に大阪府のがん検診率は全国平均と比較して低く(全国43位)、今後は府民の方々への啓発活動が重要となるでしょう。

がん治療に目を向けると、外科的療法、薬物療法、放射線療法を組み合わせる集学的治療が標準化されています。外科ではロボット支援下手術により、精密かつ低侵襲の手術が可能となりました。内科では遺伝子検査や

免疫療法、新しい治療薬などによって治療の幅が広がっています。放射線治療も装置性能の向上により高精度な治療が可能となり、患者さんへの負担が少ない治療が行えるようになりました。こうした医療の進歩に伴い、医師をはじめとする医療従事者には高度な専門性が求められています。



多様な診療科・職種が連携し 集学的治療を実施

当院は、がん診療連携拠点病院として地域のがん診療の中核的な役割を担っており、病院全体の診療においても重要な柱となっています。特長は、院内にがんセンターを有し、難治性を含むほぼすべてのがんに対応できる体制を整えている点です。診療科や職種を超えたシームレスな連携に加え、最新のがんに関する知見を集約し、診療に反映できることも大きな強みです。また、がん関連の認定看護師をはじめ、高い専門性を備えたスタッフが多数在籍しています。

診療面では、外科・内科・放射線治療科が連携する集学的治療を推進するとともに、高い効果が期待できる新しい治療方法も積極的に導入しています。さらに、高齢で合併症を抱える患者さんが多いため、がん治療と並行して他の疾患に対する治療もしっかりと行っていることも特長です。他科・多職種との連携では、診療科ごとのカンファレンスに加えて、合同カンファレンスを毎週実施。情報共有と意見交換を行うことで、最適な治療方針の策定につなげています。このような全人的・集学的治療の質は、大学病院と同等のレベルにあると自負しています。

難易度の高い がんに対する手術に注力

当院における外科的治療は、がんの種類や部位を問わず、常に高い水準を保っています。なかでも、治療が難しいとされるがんの手術に注力していることが特色です。多くの症例に対して鏡視下手術を行っており、2021年には「ダヴィンチXi」を導入し、より精密な手術が可能となりました。

さらに、難易度の高いがんに対応するため、当院の外科医の多くは「プロクター医」として指導的立場にあり、ロボット支援下手術においても高い技術水準を維持しています。加えて、手術のみならず薬物療法や放射線療法を組み合わせた集学的治療を行うことで、患者さん一人ひとりの病状に応じた最適な治療方法を選択することが可能となっています。

患者さんに適した 効果的な薬物療法を

内科的治療については、従来の抗がん剤による治療に加えて、特定のがん細胞に作用する分子標的薬、免疫療法、遺伝子治療など、多様なアプローチに対応しています。遺伝子検査を標準化しているのも特長であり、治療方法や薬剤の選定に活かしています。治療方法の決定にあたっては、専門的な知識をもつ内科医が、検査データにとどまらず、患者さんの全

身状態、生活環境、希望される生活スタイルなどを考慮したうえで、適切なアプローチを提案しています。

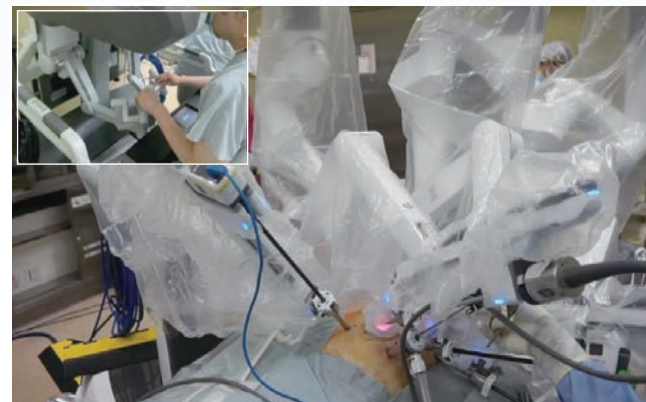
薬物療法では、副作用のマネジメントも極めて重要です。当院では、エビデンスに基づきながら、豊富な症例から得られた知見を活かすことで、副作用による負担の軽減に努めています。また、化学療法室には、がん化学療法看護認定看護師や薬剤師が常駐し、きめ細やかなヒアリングや心身のケアを通じて、安心して治療を受けていただける環境を整えています。

対応している病院が少ない 小線源治療を実施

当院の放射線治療の特色は、リニアックによる外部照射だけでなく、内部照射を行う「小線源治療」を導入している点です。放射線を出す小さなカプセルを腫瘍の内部ないし近傍に直接挿入する方法で、主に子宮頸がんや前立腺がんなどに用いられます。腫瘍のみに照射でき、周囲の正常組織への影響が少ないのがメリットです。この治療方法は高度な技術が必要なため、大阪府内でも実施している医療機関は限られています。

リニアックによる外部照射では、「IMRT(強度変調放射線治療)」や「定位放射線治療」を積極的に行っています。IMRTは、放射線の強さを部分ごとに調整し、腫瘍の形や大きさに合わせて照射できる治療方法で、前立腺がんや直腸がんなど多くのがんで採用されます。定位放射線治療は、腫瘍の位置や大きさを確認したうえで正確かつ集中的に放射線を当てる方法で、少ない回数で治療できるため患者さんへの負担が少なく、高い治療効果が期待できます。

国内では、がんの種類ごとにガイドラインが定められており、医療機関を問わず一定水準の治療が可能になっています。しかし、ガイドラインに当てはまらない症例もあり、こうした患者さんに質の高い治療を提供することが重要です。当院では、地域の医療ニーズに応えられるよう、当院ならではのがん治療を提供してまいります。



MESSAGE

がんセンター長
下部消化管外科 科長

加藤 健志(かとう たけし)

地域の開業医の先生方には、日頃より患者さんを紹介いただき、感謝申し上げます。当院は、地域医療連携の基盤となる信頼関係を大切に、今後も交流会などを通じて情報交換やがん診療の取り組みの発信を行っていきたく考えております。

放射線治療科 科長

田中 英一(たなか えいいち)

放射線治療は、装置の性能向上による高精度化が進み、治療効果が一層高まっています。大阪府内でも対応している医療機関が少ない小線源治療も実施しており、外科・内科と連携しながら、この強みを最大限に活かしてまいります。

消化器内科 医長

長谷川 裕子(はせがわ ひろこ)

検査結果だけでなく全身状態や患者さん、ご家族の想いも踏まえ、治療方針をご提案しています。多くの患者さんに質の高い治療を提案すると同時に、化学療法を継続しながらも、自分らしい日常生活を続けていけるよう寄り添う医療提供に努めます。

🔍 Doctor's View 当院診療科の代表医師が

医師が語る診療科の“現在”

小児科

小児科 科長
青天目(なばため) 信 Nabatame Shin

慢性の小児神経疾患を中心とした診療を展開

小児科は2025年8月より青天目科長を迎え、新体制がスタートしました。今後は、てんかんや不随意運動をはじめとする小児神経疾患に注力し、患者さんとご家族との信頼関係を大切に、専門性の高い診療を目指してまいります。

患者さんにご家族に 真摯に向き合う姿勢を重視

このたび、小児科科長を拝命し、重責に身の引き締まる思いでおります。今後の診療方針につきましては、在籍医師の専門領域や、地域の医療ニーズを踏まえ、どのような診療を展開することが最適かを検討し、明確にしていきたいと考えています。ひとつ申し上げられるのは、現在は医師3名体制ということもあり、対象疾患のある程度絞り込み、当科ならではの強みを打ち出していく必要があるという点です。

私自身は、20年にわたり小児神経疾患に携わってきました。小児神経疾患は小児科のなかで重要な疾患群の一つです。その一方で、大阪府全域、さらには西日本全体を見渡しても専門医が在籍する医療機関は少ないことから、この領域に注力していきたいと考えています。

診療にあたり私が大切にしているのは、「患者さんにご家族に真摯に向き合う姿勢」です。小児神経疾患はデリケートな側面が多いため、しっかりと信頼関係を築き、現在抱えておられるお困り

ごとや、将来どのような生活を望んでおられるのかを共有しながら、課題解決に向けた治療とサポートに努めてまいります。



神経症候学の知見を活かし 患者さんに適した治療を

小児神経診療では多彩な病態・疾患を対象とします。なかでも私が専門としているのは、てんかんや、本人の意思に反して体が動いてしまう不随意運動、遺伝子異常によって起こる小児神経疾患です。こうした疾患は、検査だけで診断できないことも多く、詳細な問診と神経症状の背景となる病態を探る神経症候学の知見を組み

合わせて、患者さんの中で何が起きているのかを推測しながら診療をしています。そして、小児神経疾患は、長期にわたる診療が必要なことも多く、症状の変化はもちろん、患者さんのライフステージに合わせて、診療目標を変更・修正することも必要です。

近年では、遺伝子のなかでタンパク質の設計図となっている部分に焦点を絞って網羅的に調べられる全エクソーム解析が進歩し、従来診断のつかなかった患者さんでも原因を特定できることも出てきました。こうして診断がつくことで、効果的な治療が見つかる場合も稀ながらあります。

小児神経疾患に対する治療は、薬物療法だけでなく、てんかんに対する手術や食事療法のような多様なアプローチがあります。また、病院の外における療育やリハビリ、学校の協力も必要です。患者さんの状態や希望に応じて適切な治療方法を選択し、段階的に行っていくことが重要です。

これまで学んできた知識と新しい技術を生かして、患者さんにご家族ができる限り安心・安全に暮らせるよう注力していきたいと考えています。

ドクターからのメッセージ

大阪市には小児神経疾患の専門医が所属する病院はありますが、医療資源は十分とはいえません。今後も当科の特色を活かしたフォローに努めるとともに、専門医が少ない河内エリアやその他の地域の方々にも対応していきたいと考えています。

治療・手術などの取り組みや実績についてお話しします。

診療科の“現在”

口腔外科

口腔外科 科長
鹿野 学 Kano Manabu

新体制で口腔がんと顔面外傷の治療を推進

2025年4月に新科長が就任し、新体制で診療にあたっている口腔外科。これまでの診療方針を継承して幅広い疾患に対応するなか、特に口腔がんの治療に注力し、機能温存・再建に配慮した根治を目指す治療を行っています。

根治と機能温存を目指す 口腔がん治療を実施

2025年4月より口腔外科科長に着任しました鹿野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。当科ではこれまでの診療方針を引き継ぎ、顎顔領域の腫瘍をはじめ、顔面外傷、歯や歯周組織の疾患、顎関節疾患など、幅広い疾患に対応しています。そして、新しい治療方法も効果的に取り入れながら、確実性を重視しつつ根治を目指す治療に取り組んでいます。

特に力を入れているのが、口腔がんの手術です。口腔がんの罹患数は増加しており、なかでも舌がんが全体の47%を占め、最も多くなっています。患者さんの大半は高齢者ですが、近年では20代～30代の若年層も増えており、深刻な問題となっています。一方で、治療技術や術後管理の進歩によって、死亡率は改善しています。こうした状況を踏まえ、今後も治療ニーズが高まると予測されることから、当科では診療体制の強化を図っています。現在は医師5名体制で診療にあたり、それぞれが高い専門性を有していると

自負しております。

現在のところ、口腔がん治療の第一選択は手術です。当科では、再発防止のため、腫瘍を確実に切除する根治的治療を基本としつつ、機能温存や再建にも力を入れています。これにより、食事や会話など、日常生活への影響を最小限にとどめるよう努めています。さらに、患者さんの状態に応じて、がん薬物療法と放射線療法を組み合わせた治療も積極的に行っています。がん薬物療法は自科で対応しており、放射線療法についても放射線治療科と連携し、症例ごとにカンファレンスを行うなど、切れ目のない治療体制を築いている点が大きな特長です。

軽度の骨折から重症まで 顔面外傷の治療を強化

顔面外傷の治療も当科が注力している重要な領域のひとつです。現在は救急搬送で来院される患者さんがほとんどで、その多くが多発骨折をはじめとする重症例ですが、今後は地域のクリニックの先生方との役割分担を踏まえ、軽度

の外傷にも積極的に対応していきたいと考えています。

このほかにも、親知らずの抜歯や、菌性感染症をはじめとする難治性の歯周病、顎関節症などの診療にも幅広く取り組んでいます。開業医の先生方との連携では、親知らずの抜歯と顎関節症など顎の不具合に対する治療が多い状況ですので、クリニックでの治療が困難な全身管理を要する場合には、ぜひご相談ください。

これからも院内のスタッフはもちろんのこと、地域の医療従事者の方々とも協力して、医療の充実を図っていきたくと考えています。その一環として、歯科医師会に入会いたしましたので、直接の情報交換や意見交換などもさせていただければ幸いです。



ドクターからのメッセージ

口腔がんの治療において、早期発見・早期治療は大きなカギとなります。日頃より開業医の先生方にはお力添えをいただいております。感謝申し上げます。診断がむずかしいケースがありましたら、お気軽にご相談いただければと思います。

Close UP!

センター・専門外来のご案内



当院では、地域の医療機関の皆さまに安心して患者さんをご紹介いただけるよう、センター・専門外来の体制を見直しましたので、改めてご案内いたします。

地域の医療機関の皆さまへ

当院には39の診療科があり、それぞれに、当院が得意とする高度で専門的な診療領域があります。しかし、その中には必ずしも広く知られていない診療領域もあるようです。そこで、「センター」や「専門外来」として当院が得意とする領域を明示し、当院の取り組みや特色、紹介・受診方法をわかりやすく説明したページをホームページ内に作成しました。

また、疾患は分かっている、内科と外科のどちらへ紹介すべきか迷うことも多いのではないのでしょうか。そこで、それぞれの疾患領域の内科と外科を合わせて「〇〇センター」とし、その特色を説明したページも作成しました。センター宛ての紹介も受け付けていますので、内科か外科かで迷う場合はご活用ください。

合わせて各診療科のページもリニューアルしましたので、当院が得意とする診療内容について、さらに広く、そして詳しくご理解いただければ幸いです。

今後も、当院が積極的に取り組む領域については、新たなセンターや専門外来として広報していきたいと考えています。今回リニューアルしたホームページが、地域連携推進の一助となることを期待しています。

統括診療部長 / 上田 恭敬

センター・専門外来のご案内

センター		専門診療センター	
がんセンター		外傷センター	心血管インターベンションセンター
心臓血管センター		人工関節センター	人工内耳・難聴センター
脳神経センター		脊椎外科センター	炎症性腸疾患 (IBD) センター
消化器センター		上肢・手の外科センター	消化器内視鏡センター
呼吸器センター		心不全センター	1型糖尿病センター
エコーセンター		不整脈センター	頭痛センター
専門外来			
循環器内科		耳鼻咽喉科	
禁煙外来	狭心症外来	補聴器外来	腎臓内科
ペースメーカー外来	心房細動外来	人工内耳リハビリ外来	IgA腎症外来
心不全外来	下肢閉塞性動脈硬化外来	中耳炎・難聴外来	多発性のう胞腎外来 (PKD外来)
不整脈・アブレーション外来	腫瘍循環器外来	鼻副鼻腔外来	糖尿病・内分泌内科
			先進糖尿病治療外来

ご紹介方法・ご予約方法

ご紹介・ご予約の際は地域医療連携室までお問合せください。

☎06-6946-3516 (直通)

センター・専門外来の詳細はこちら



お知らせ



臨床研究センター

臨床研究センターからのお知らせ

臨床疫学研究室が実施中の研究内容

臨床疫学研究室の取り組み

臨床疫学研究室は、EBM研究開発部に属する研究室のひとつで、臨床情報を用いて主に消化器疾患の病態を検証し、最適な診療方針や治療方法を検討しています。

実施中の研究内容

国立病院機構 (NHO) では、全国に点在するNHO病院のネットワークを活用した多施設共同研究を企画し、一般臨床に役立つ質の高いエビデンスの創出を図っています。そのなかで大阪医療センターが代表を務めるNHOネットワーク共同研究を紹介します。

脂肪性肝疾患患者の自然経過とイベント発生に関する前向き観察研究

脂肪性肝疾患 (脂肪肝) は、日本の成人の四人に一人に認められ、国内外ともに増加傾向です。脂肪肝は肝臓に脂肪が蓄積するだけの心配のない病態と考えられてきましたが、最近は心血管疾患や悪性腫瘍、肝疾患関連死に関与することが報告されており、特に肝臓の線維化が進展した患者さんにそのリスクが高いと考えられています。肝臓の線維化の程度は、肝生検の他、画像検査や血液検査を用いた非侵襲的評価法により評価されますが、肝線維化が進展するのはどのような方なのか、どのように肝線維化が進展していくのかについてはわかっていません。そこで脂肪肝患者さんを前向きに追跡評価することで、肝線維化進展の病態把握や肝線維化進展へのリスク因子を解明することを目的に本研究を開始しました。

脂肪肝患者の通常診療で得られる診療情報を基軸に、肝機能や肝線維化指標の経時的推移、イベント発生などを収集し、脂肪肝の自然経過やイベントリスクを解析しています。全国のNHO病院にもご協力いただき、多くの脂肪肝患者さんを登録いただいております。観察期間中に肝線維化進展の兆しや、肝細胞癌を含む悪性腫瘍や心血管イベントの発生が認められており、本研究結果が脂肪性肝疾患への対応や悪化リスクを有する症例の効率的な囲い込みにつながることを期待しています。

上記研究以外にも多くの臨床研究を実施しており、参加基準に合致する患者さんには臨床研究の意義を説明の上、成果の発信を通じて医療の質向上に貢献できるよう努めています。

臨床疫学研究室



当院HPにて、臨床疫学研究室を紹介しておりますのでぜひご覧ください ▶▶▶